

昆虫を追ってマレーシアへ通つようになつて四〇年以上になる。第二の故郷のような国である。毎年通えば、その変化には鈍感になる。今年はいつもと、ちよつと違つた旅を試してみた。昆虫撮影ではなく、ペナンにあるバタフライファームの開園二五周年記念式典に参加したのだ。

当初は海外の観光客が主な客層だったバタフライファームも、今は現地の人たちの入場者がずつと多い。年間三〇万人が訪れるという。この数は日本などの昆虫館よりも多いだろう。ここでは私も少しばかり展示に協力している。写真コーナーもタッチパネルの液晶テレビが導入されて、見映えがするものになった。マネージャーを務めるのは開設者のデイビッドの息子、ジョセフ。世代交代が進んでいる。

イベントに訪れた人たちの中に、デジタル一眼レフを持った若い女性が多い。取材にきたマスコミかなと思つたら、その従業員たちだった。聞いてみれば、はやりのFaceBookに写真を載せるのに、一眼レフで撮つた方が綺麗だからという。

ペナンのジョージタウンは世界遺産に登録されている。歴史的な古い建物を利用したブチホテルも多い。その中でユネスコからも表彰されている、通称ブルーマンションというホテルに泊まってみた。中国の華僑で、現地の風

プロフィール
1947年東京に生まれる。昆虫を中心に撮影する自然写真家。
幼少期より昆虫に親しみ、学生時代に撮影した「スジグロシロチョウの交尾拒否行動」の写真が雑誌に掲載されたことを契機に、フリーの写真家の道を進む。著書「昆虫の癡惑」（平凡社）で1994年日本写真協会年度賞受賞。主な著作に「蝶の飛ぶ風景」（平凡社）、「蛾蝶記」（福音館書店）、「昆虫顔面図鑑」（実業之日本社）などがある。



マレーシア今昔

海野和男

習に適應し、中国本土よりイギリスとの関係を重視したというプラナカンの館である。古い建造物をホテルとして使うことで、維持管理しようという試みである。

部屋は広く、快適だ。こんな歴史的建造物に泊まれるとは素晴らしいと思ったのだけれど、三泊して二回もパーティーがあった。庭を貸し切つての生演奏付きの医者の集い。もう一日は内庭のような場所での同窓会。六〇過ぎの人たちが集まって、バンドを入れてのカラオケ。深夜まで続くのはちよつとまいつてしまった。もっともこんな建物があったら、ほくもパーティーに使つてみたいと思つのだが。

四〇年来、毎年必ず行くカメロンハイランドではおかしなドイツ人に出会つた。ジープタイプのベンツに乗つていて、なにやらわけありげだ。連れていた犬の写真を撮らせてもらうことをきっかけに、少し話をした。ほくと同年代で、三国同盟の話などする。

どうやら戦後第一世代である。今はカメロンハイランドに住んでいるらしい。昔はよかつたという。「今はローカルが多くて」と嘆くのである。四〇年前にはヨーロッパ人の観光客しかいなかったカメロンハイランドは、今は現地の観光客でこつた返している。そして、そこに住む日本人も何百人もいる。時代は変わつているのである。

月刊 みんな

11月号目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
マレーシア今昔 海野 和男</p> <p>2 特集 かんがえる足
ふしぎな足 野村 雅一</p> <p>4 「アルク」「ハシル」の認知と言語表現 今井 むつみ</p> <p>5 子どもの手足を形にのこす 伊藤 由美子</p> <p>6 雲南省大理盆地の靴の中敷 横山 廣子</p> <p>7 ハイヒールから透けて見えるもの
——おしゃれか健康か 山本 芳美</p> <p>8 カラーウ——出家修行者のゲタ 三尾 稔</p> <p>8 水虫と日本精神 眞嶋 亜有</p> <p>9 イギリスの水虫論 保明 綾</p> <p>10 研究フォーラム
失われた共存の可能性を求めて
菅瀬 晶子</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 地球ミュージアム紀行
西洋の巨匠で飾られた南米の美の殿堂
チリ国立美術館
藤川 哲</p> <p>15 みんなく私の逸品
マツタロッカムイ（奥に座す神）
北原 次郎太</p> <p>16 散策と思索の径
南シナ海の東と西
本多 守</p> <p>18 多文化をささえる人びと
当たり前語る社会を作りたい
ベトナムルーツの子どもたちのかかわりから
朴 洋幸</p> <p>20 歳時世相篇
ニジェル河を泳いで渡る牛
竹沢 尚一郎</p> <p>22 フィールドで考える
失われた村を想い続ける66年——沖繩・嘉手納町
井口 淳子</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|